『正法華経』「薬王如来品」の後分に見る同義複合詞の引用*

白 景皓

1　問題の所在

梵本『法華経』の現存の漢訳は、『薩曇分陀利経』（失訳、西晋［265–316 年］）、『正法華経』（竺法護訳、286 年）、『妙法蓮華経』（鳩摩羅什訳、406 年）、『添品妙法蓮華経』（闍那崛多笈多共訳、601 年）である。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』と比べて、「古訳」とされる竺法護訳『正法華経』は難読の中古漢語や文句で訳された経典である。

西 2020: 258 が評価したように、『正法華経』は本文が難解・晦渋であるため、正確な解読が不能とされるものである。しかし、百年の間、『正法華経』の精読を試みている研究は決して少なくない。『正法華経』に関する最も代表的な研究は、境野 1931 を始めとして、辛嶋 1998 による『正法華経』の訳語とサンスクリット語との対応研究、河野 2006 による初期漢訳仏典の研究や斎藤 2013 による『正法華経』における偈の研究などがある。拙稿（白 2017, 2018）は先行研究を踏まえた上で、『出三蔵記集』などの伝記に基づいて竺法護の生涯を概観し、『正法華経』〈龍女成仏〉と〈会三帰一偈〉に見られる竺法護の散文訳と偈頌訳の特徴を明らかにした。また、拙稿（Bai 2019）は、『正法華経』「薬王如来品」の後分（「法師品第十」の相当部）に見られる竺法護の新造語の特徴として、以下の諸点を指摘した。

1. 類義語を重ねる新造語が見られる。例：「殃釁」、「憍慢恣」。
2. 補足語が既存語の前に導入される。例：「續見」、「續蒙」。
3. サンスクリット語の接頭辞に対応する表現が使用される。例：「分別説」。
4. サンスクリット語の複合語の直訳表現が使用される。例：「世吼」、「如来水」。
5. 既存語に新しい意味が与えられる。例：「至真」、「上句」。
6. 西晋期に使われなくなった廃語が使用される。例：「崎嶇」。

そのうち、1. 類義語を重ねる新造語は、本稿に提示される「同義複合詞」に属するものである。河野 2006: 273–284 が分析したように、類義語を重ねる訳語の多用は、竺法護訳の判断基準の一つであると言っても過言ではない。しかしながら、拙稿（Bai 2019）は竺法護が新造した同義複合詞の特徴には触れたが、竺法護が他典籍から引用した同義複合詞の内実を究明していない。したがって、本稿は「同義複合詞」の概念を示した上で、竺法護訳『正法華経』「薬王如来品」の後分における、竺法護に先行する諸経典と典籍から引用した同義複合詞を提示しながら、それらの同義複合詞の引用に見る竺法護の訳経態度を明らかにすることを目的とする。

2　同義複合詞と対義複合詞

王力 1943: 10 は、2 個あるいは 2 個以上の単純語が並列して構成した中国語の合成語を解釈するために、「並列複合詞」という術語を初めて使用した。並列複合詞には、「同義並列複合詞（同義複合詞）」と「対義並列複合詞（対義複合詞）」という二種類がある。また、丁声樹等 1961 が提示したその二種類とそれらの例示は、鳥井 2001: 78 において以下に提示されている。

---

*この論文の原稿は、「佛教傳播與語言變化—第 14 屆漢文佛典語言學」國際學術研討會 2020（香港：香港中文大學人間佛教研究中心［オンライン発表］）に提出されたものである。

1.「同義複合詞」

意味が相同じあるいは相近い成分を一つに並列して 1 個の単語を構成するものである。人民（人民）、朋友（友達）、語言（言語）、文字（文字、文章）；生産（生産する）、闘争（戦う）、請求（申請する）、計算（計算する、思案する）；偉大（偉大だ）、勇猛（勇猛だ）、精細（精密だ）、奇怪（おかしい）；全部（すべて）、稍微（わずかに）、或許（あるいは）、剛纔（今しがた）などがある。

2.「対義複合詞」

意味が相対するあるいは相反する成分を一つに並列して 1 個の単語を構成するものである。例えば、大小（大きさ）、長短（高さ）、是非（是非、いざこざ）；上下（事物の上下、地位等の上下）、左右（左右、そば）、彼此（両方、互い）；反正（どのみち）、遅早（早晩）、開關（電気のスイッチ）、買賣（商売）などがある。

これらは、現代中国語における同義複合詞と対義複合詞の例示である。本稿が注目している同義複合詞の定義はこれに基づくものである。

また、橋本 2005: 22–25 が指摘したように、中国の上古文献、例えば、戦国時代（紀元前 5 世紀–紀元前 221 年）に成立した『孟子』や『墨子』などには、主に感情を直接に表す同義複合詞の例示も数多く存在している。その具体例としては、例えば、「憂患」、「安楽」[2]、「富貴」[3]、「仁義」[4]などがある。

仏典の古訳にともなって古典中国語の語彙が豊富になり、山口 1977: 146–147 が分析した通り、例えば古訳の代表者である支謙はサンスクリット語の sattva または bahujana を「衆生之類」で訳していない。その代わりに、中国文化の理解を背景にした「蚑行喘息人物之類」（行動して呼吸する人物の類）という訳語を選択したのである。この訳語の修飾部としての「蚑行喘息」はまさしく中国風に潤色した同義複合詞である。

3 『正法華経』「薬王如来品」の後分における同義複合詞

ここで、前章で説明された同義複合詞の定義を念頭に置いて、『正法華経』「薬王如来品」の後分には、他典籍から引用された同義複合詞が含まれる文句を次のように提示する。

1. 散文 I（T9.100b14–100c26）における同義複合詞の用例数（8）：

T9.100b24–25: 是等儔類、愍傷衆人故來生耳。

T9.100b25: 諷誦、書寫、載於竹帛。

T9.100b27: 方如如來聖尊上句。

T9.100c13: 斯法訓者若復不暢。

T9.100c14: 常懷毒害。

---

[2]C:『孟子』「告子下」：然後知生於憂患、而死於安楽也。
書き下し：然る後に憂患に於いて生き、而も安楽に於いて死するなりと知る。
現代語訳：そうして憂患によって生き、安楽によって死ぬことがわかる。

[3]C:『孟子』「滕文公下」：富貴不能淫。
書き下し：富貴も淫する能わず。
現代語訳：富貴なる〔者〕になった〔と雖も〕心を乱されることはない。

[4]C:『墨子』「貴義」：去愛、去悪、而用仁義。
書き下し：愛を去り、悪を去りて、仁義を用す。
現代語訳：貪り、悪〔行〕を捨てた後、仁義をなす。

2. 偈頌 I（T9.100c27–101b04）における同義複合詞の用例数（11）:

T9.100c27: 若欲住佛道、志慕己功德。

T9.101a02: 説此經法者、愍傷於衆生。

T9.101a05:矜哀於衆庶。

T9.101a07: 斯經爲尊上。

T9.101a09: 衣服諸覆蓋、常供給法師。

T9.101a17: 値遇斯典、設使聞者、書寫執持。

T9.101a18: 見於目前、誹謗如來。

T9.101a27: 明智者德。

3. 散文 II（T9.101b05–102a11）における同義複合詞の用例数（13）:

T9.101b05–06: 吾每散告、前後所宣經品無量。

T9.101b08–09: 如來正覺無所毀敗、於内燕居。

T9.101b13: 他方世界現在如來、悉覩見之。

T9.101c04: 捨於平地穿鑿高原。

T9.101c12–13: 諷誦、精修、懷抱在心、而奉行之。

T9.101c21: 或恐或怖、心懷畏懼。

T9.101c25–26: 謂人忍辱柔和安雅、是則名爲如來被服。

T9.102a04: 比丘、比丘尼、清信士、清信女頌宣此法。

T9.102a05: 吾起令樂、必使愛喜。

T9.102a08: 雖復迥在異方刹土。

4. 偈頌 II（T9.102a12–102b20）における同義複合詞の用例数（10）:

T9.102a23: 還聞此經王、聽之思惟義。

T9.102b01: 設刀凡石打、爲人見罵詈。

T9.102b11: 假使獨自行、而諷誦翫習。

T9.102b14: 吾遣與共俱。

T9.102b15: 其人辯才、無所罣礙。

T9.102b17: 猶如佛聖、之所建立。

T9.102b19–20: 得見諸佛、如江河沙。

散文中における用例は合わせて 21 件であり、偈頌中における用例は 21 件である。

竹田 2010: 35 は、宋代（10 世紀）以降は口語・俗語には同義複合語が多用されていると指摘するが、宋代より遥か前の竺法護が訳経事業を行った西晋時代において、同義複合語がいかなる場合で使用されるのかは未だ解明されていない。

ここで、上記の全ての同義複合詞は、1. 竺法護が先行の訳経者が使用した語を引用したもの、2. 竺法護が士人の教養書から引用したものという二種類に分けられる。次の **3.1** と **3.2** において、それぞれ 1 と 2 を考察すると、竺法護の訳経態度が分かる。

3.1 先行訳からの同義複合詞

竺法護は安世高を始めとする先行の訳経者が初めて使用した同義複合語を自分の訳経の中で継承している。

1. 支婁迦讖（147–?年）の 1 例

名詞：「刹土」[5]

2. 安世高（?–170?年）の 7 例

名詞：「儔類」[6]、「毒害」[7]

動詞：「被服」[8]、「覆蓋」[9]、「毀敗」[10]

副詞：「設使」[11]、「獨自」[12]

3. 支曜（生没年不詳、185 年渡来）の 1 例

名詞：「罣礙」[13]

4. 康孟祥（?–212?年）の 3 例

動詞：「執持」[14]、「散告」[15]、「共俱」[16]

5. 維祇難（?–224?年）の 1 例

動詞：「愛喜」[17]

6. 支謙（195?–254 年）の 16 例

名詞：「佛聖」[18]、「聖尊」[19]、「經法」[20]、「江河」[21]

形容詞：「尊上」[22]、「明智」[23]

副詞：「假使」[24]

---

[5]『道行般若經』T8.438a17–18: 於阿僧祇刹土、諸佛所而作功德。

[6]『佛説阿難問事佛吉凶經』T14.754a26: 五福超法出、天人同儔類。

[7]『佛説尸迦越六方禮經』T1.252a10: 鬼神邪毒害、不犯有戒人。

[8]『佛説一切流攝守因經』T1.813c18–19: 從所用被服、不綺故不樂故不貪故不嚴事故。

[9]『佛説七處三觀經』T2.876a07–09: 譬喻迦羅越若樓若堂屋上覆蓋、若便雨來柞亦不漬椽亦不漬壁亦不漬。

[10]『佛説阿難問事佛吉凶經』T14.755b27: 強梁嫉賢、既不能爲、復毀敗人。

[11]『佛説七處三觀經』T2.878b28–29: 設使聞佛法教、不應除塵垢。

[12]『佛説普法義經』T1.923c10: 十爲獨自守。

[13]『佛説阿那律八念經』T1.836c17–18: 意不隨欲、淨無罣礙。

[14]『修行本起經』T3.465c07–08: 太子即與優陀難陀、調達、阿難等五百人、執持禮樂射藝之具。

[15]『中本起經』T4.160a23: 願見示導、散告眞言。

[16]『中本起經』T4.156c28–29: 迫蹶不已、便共俱飯。

[17]『法句經』T4.567c18: 愛喜生憂、愛喜生畏。

[18]『佛開解梵志阿颰經』T1.260b21: 五百人言、佛聖智明。

[19]『大明度經』T8.495c02–03: 遠愚近聖尊戴三寶。

[20]『佛説七知經』T1.810a15–16: 彼彼所説經法、悉曉其義。

[21]『佛説阿彌陀三耶三佛薩樓佛壇過度人道經』T12.303b28–29: 亦無有小海水、亦無江河恒水也。

[22]『佛説梵網六十二見經』T1.266b27–28: 得常在終不轉移亦不死、常在尊上梵天。

[23]『佛説太子瑞應本起經』T3.482b04: 迦葉念佛神聖明智。

[24]『弊魔試目連經』T1.868b03: 假使在佛前、及觀比丘衆。

動詞：「愍傷」[25]、「諷誦」[26]、「矜哀」[27]、「供給」[28]、「誹謗」[29]、「覩見」[30]、「値遇」[31]、「思惟」[32]、「罵詈」[33]

竺法護が先行訳から引用した上記の同義複合詞の用例は 29 件であり、全ての用例（42 件）の半数以上を占めている。これらの用例のうち、支謙訳から引用したものが最も多いことから見ると、竺法護は主に支謙訳を手本としたと推測できる。河野 1989: 86 が提示したように、竺法護と支謙は同じく月支一族出身の漢語の習得に努めた者である。竺法護にとって支謙の先行訳は極めて重要な参照基準であると考えられる。

次に、『正法華経』「薬王如来品」の後分における、竺法護が先行訳にある同義複合詞を利用した文句とそれらに対応するサンスクリット原典を掲げる。

1.「儔類」、「愍傷」

T9.100b24–25: 是等儔類、愍傷衆人故來生耳。

これらの友がら（儔類）は、数多くの人々を憐れむ（愍傷）ために来て出生したのである。

KN (10) 225.2–3: sattvānām anukampārtham asmiñ jambudvīpe manuṣyeṣu pratyājātā veditavyāḥ |

〔彼らは〕衆生達を憐れむために、このジャンブ州における人間の中に再生したと知られるべきである。

2.「經法」

T9.101a02: 説此經法者、愍傷於衆生。

この教法（經法）を説く者は、衆生達を憐れんでいる。

KN (10) 228.9: sattvānām anukampārthaṃ sūtraṃ yo vācayed idam ‖ (3cd)

この経典を〔衆生達に〕唱えせしめる者は、衆生達を憐れむために . . .〔後略〕. . .。

3.「覆蓋」、「供給」

T9.101a09: 衣服諸覆蓋、常供給法師。

衣服などの覆い被せるもの（覆蓋）を常に法師に差し上げる（供給）。

KN (10) 228.15: divyehi vastrehi ca chādayeyā ratnehi abhyokiri dharmabhāṇakam ‖ (6cd)

法師に対して、天上の衣服をもって着せるべきである。そして、宝石をもって撒かすべきである。

4.「誹謗」

T9.101a18: 於今佛在、見於目前、誹謗如來、具足一劫。

〔ある人は〕今現在、目前において仏がいることを見て、満一劫の間に如来を誹謗している（誹謗）。

---

[25]『佛説七知經』T1.810b20–21: 愍傷世間、利寧天人。

[26]『佛説釋摩男本四子經』T1.849b17: 我當歸、思惟、諷誦是經典。

[27]『菩薩本縁經』T3.53a14: 汝今若見、垂顧矜哀。

[28]『須摩提女經』T2.842b28–29: 供給飲食、種種甘饌。

[29]『佛説梵網六十二見經』T1.264c13: 徐行出入、誹謗嫉妬。

[30]『弊魔試目連經』T1.867a11–12: 即時覩見弊魔作化徹景入其腹中。

[31]『佛説須摩提長者經』T14.805c17: 値遇諸佛善知識、會不遇惡縁。

[32]『佛開解梵志阿颰經』T1.262a06: 沙門思惟、身口意淨。

[33]『佛説頼吒和羅經』T1.870a07: 無有白者、但得罵詈。

KN (10) 229.7–8: yaś caiva sthitveha jinasya saṃmukhaṃ śrāved avarṇaṃ paripūrṇakalpam | (10ab)

また、ここにおいて、ある人は悪心を抱き、眉をしかめ、勝者（仏）の面前に立ち、満一劫の間、非難の言葉を聞かせ続けるであろう。

5.「散告」

T9.101b05: 佛告藥王菩薩、吾每散告。

仏は薬王菩薩〔であるあなた〕に告げ、私はよく〔あなたに〕伝える（散告）。

KN (10) 230.5: ārocayāmi te bhaiṣajyarāja prativedayāmi te |

薬王よ、私はあなたに〔以下のことを〕告げる。あなたに〔以下のことを〕知らせる。

6.「覩見」

T9.101b13: 他方世界現在如來、悉覩見之。

他の方角にある世界にいる現在の如来達は皆彼らを見守っている（覩見）。

KN (10) 230.12: anyalokadhātusthitaiś ca tathāgatair avalokitāś . . . |

また、〔彼らは〕他の世界にいる如来達によって見守られている〔者達である〕。

7.「愛喜」

T9.102a04–05: 設使有聞而不樂者、吾起令樂、必使愛喜。

たとい〔この経典を〕聴聞して楽しめない者達がいれば、私は〔彼らに〕楽しませて、必ず〔彼らにこの経典を〕好ませる（愛喜）。

KN (10) 235.5–6: te tasya dharmabhāṇakasya bhāṣitaṃ na pratibādhiṣyanti dharmaśravaṇāya |

彼らはその法師が説いたものを排斥せず、拒絶しないであろう。

8.「刹土」

T9.102a08: 雖復迥在異方刹土、普當自現令衆人見。

〔私は〕遥かに他の方角にある仏国土（刹土）にいながら、自ら現れて数多くの人々に〔自分の姿を〕示現するとしよう。

KN (10) 235.7:

anyalokadhātusthitaś cāhaṃ bhaiṣajyarāja tasya kulaputrasya mukham upadarśayiṣyāmi |

また、薬王よ、私は他の世界にいながら、その善男子に〔私の〕顔を示現するとしよう。

9.「江河」

T9.102b19–20: 得見諸佛、如江河沙。

大きな川の砂〔の数〕のように諸々の仏達を見ることができる。

KN (10) 238.5: paśyanti buddhān yathā gaṅgavālikāḥ || (35d)

ガンジス河の砂〔の数〕のように多くの仏達を見るのである。

竺法護は、サンスクリット原典の専門用語を扱う時、例えば、例示中の anukampa、avarṇa、avalokita、sūtra、prativedayāmi と gaṅga を翻訳する時、それぞれ支謙訳にある「愍傷」、「誹謗」、「覩見」、「經法」と康孟祥訳にある「散告」、「江河」を使用する。これらの同義複合詞は先行の訳経者によって初めて使用されたものなのである。斎藤 1997: 30 が指摘したように、後漢の安世高から六朝中期までは仏典の訳語が決定されていないが、竺法護が先行訳の古例に従って翻訳することから見ると、訳語を統一化させることに力を入れていたと考えられる。

また、河野 2006: 223–234 が挙げた竺法護訳『説一切漸備経』の実例[34]のように、竺法護は同一語の訳し分けを重要視している。例示中の anukampa に対応するのは支謙訳にある「愍傷」であるが、文章の続きに再び anukampa が出る時、「愍傷」という同義複合詞の表現を避けるために、同様に支謙訳にある同義複合詞の「矜哀」を同義表現として用いて翻訳する[35]。同一語の訳し分けに工夫を凝らしていたため、自分の認識範囲内の同義複合詞が足りない時、竺法護は、諸先行訳にある同義複合詞の訳語を参考にしていたことになると考えられる。

残りの例示中の維祇難訳にある「愛喜」や康僧會訳にある「刹土」などの表現は、サンスクリット原典と対応できないものであって、これらは補填訳または意訳である。しかし、一方、竺法護に先行する訳経者の漢訳経典と対応している原典はあまり多く存在していないため、維祇難訳にある「愛喜」や康僧會訳にある「刹土」などの表現は意訳か否か分からないので、竺法護がそれらの先行訳にある同義複合詞を使用して翻訳する動機を判明できない。

以上から見ると、竺法護は、翻訳に当たって、先行訳から訳語を一つずつ洗い出した上で、それらを自分の訳経の中に継承していたと言える。このような翻訳態度は、『出三蔵記集』（僧祐撰）に記される、竺法護に対する「事事周密（細かい事柄までに注意が行き届くこと）」という評価によって裏付けられている[36]。

3.2　知識人の教養書からの同義複合詞

蜂屋 1990: 32 は、魏晋六朝時代の「知識人」とは貴族・豪族階級および彼らと密接に関わった宗教者たちのことを指すと指摘する。また、同 1990: 33–34 は、王衍（256–311 年）を西晋の知識人の典型例として取り上げ、『晋書』「王衍伝」によると、彼を代表とする西晋の知識人たちが「玄言を妙善して唯だ老荘を談ずるを事と為す[37]」というような、現実から離れて観念世界に遊ぶ態度で処世していたと述べている。

竺法護は西晋以前に成立した、西晋の知識人にとっての教養書から引用したものと思われる同義複合詞をも使用していた。次に、これらの同義複合詞を提示する。

1. 春秋戦国時代に成立した著作に見出された語彙の 3 例

動詞：「燕居」[38]、「翫習」[39]

形容詞：「安雅」[40]

2. 前漢に成立した著作に見出された語彙の 5 例

名詞：「竹帛」[41]

---

[34]Skt. ekakṣanalavamuhūrtena に「須臾之間」、「須臾」、「一時」、「須臾一時」、「一時之間」、「須臾之頃」、「一時須臾」の諸訳語が使用されている。

[35]T9.101a02–05: 説此經法者、愍傷於衆生、世吼之所遣、來化群生類、假使持是典、所生常精進。強勇而自來、矜哀於衆庶。

[36]『出三蔵記集』T55.48a12–13: 考其所出。事事周密耳。
書き下し：其の出る所を考し、事事は周密なるのみ。
現代語訳：それ（訳語）が出典を考察した上で、細かい事柄までに注意が行き届くことである。

[37]現代語訳：奥深い文言を素晴らしいものと認めた上で、老荘思想〔に関する経典〕のみ論説することを真面な用事とする。

[38]C:『論語』「述而」（春秋）：子之燕居、申申如也、夭夭如也。

[39]C:『戰國策』「楚懷王拘張儀」（戦国）：秦王有愛女而美、又簡擇宮中佳翫麗好翫習音者。

[40]C:『荀子』「榮辱」（戦国）：楚人安楚、君子安雅。

[41]C:『賈誼新書』「道德説」賈誼著（前漢）：是故著此竹帛、謂之書。

動詞：「建立」[42]、「志慕」[43]、「畏懼」[44]

形容詞：「柔和」[45]

3. 後漢・三国時代に成立した著作に見出された語彙の 3 例

動詞：「頒宣」[46]、「書寫」[47]、「穿鑿」[48]

4. 西晋に成立した著作に見出された語彙の 2 例

名詞：「法訓」[49]、「懷抱」[50]。

上記の 13 件は竺法護によって西晋以前の教養書から引用されたものである。これらの訳語の初出箇所については、脚注を参照されたい。これらの教養書は、諸子百家の思想書、史籍及び道教経典の類の書物である。

成田 2020: 5 が論述したように、漢訳が始まった古訳時代、老荘思想や儒教などの在来の伝統思想の基盤を持っている中国人、特に知識階級に漢訳仏典を受容させるために、中国古来の思想をもって仏教を解説し講述する試みが行われている。

『出三藏記集』（僧祐撰）によれば、知識人の教養書から引用された訳語が頻出する『正法華経』が当時の仏教界で親しまれていたという事実が確認される。

> 『出三藏記集』T55.56c26–57a02: 永熙元年八月二十八日。比丘康那律。於洛陽寫正法華品竟。時與清戒界節優婆塞張季博董景玄劉長武長文等。手執經本詣白馬寺、對與法護。口校古訓講出深義。以九月大齋十四日。於東牛寺中施檀大會講誦此經。竟日盡夜、無不咸歡。
>
> 書き下し：永熙元年八月二十八日、比丘康那律（こうなりつ）、洛陽に於いて、『正法華』の品を寫して竟（おわ）れり。時に、清戒界節（しょうかいかいせつ）、優婆塞張季博（ちょうきはく）、董景玄（とうけいげん）、劉長武（りゅうちょうぶ）、長文（ちょうぶん）等とともに、手に經の本を執りて、白馬寺（はくまじ）に詣り、法護と對して、古訓（こくん）を口校（こうこう）して、深き義を講出す。九月の大齋（たいさい）、十四日を以て、東牛寺（とうぎゅうじ）の中の施檀大會（せだんたいかい）に於いて、此の經を講誦（こうじゅ）し、日竟りて夜盡きて、咸（みな）、歡（よろこ）ばせざること無し。
>
> 現代語訳：永熙元年（290 年）八月二十八日、比丘、康那律は、洛陽において、『正法華経』の〔完全な〕品を書写し終わった。その時、〔康那律は〕戒律を具えて浄らかな行いを有する信者、張季博、董景玄、劉長武、劉長文などと共に、『〔正法華〕経』の写本を手に持ち、白馬寺（洛陽）に参り、竺法護と対面して、〔『正法華経』の〕原意を口頭で整理し、奥深い意義を説き明かした。九月の大斎が行われる十四日に、東牛寺の施檀大会（施主が僧侶を供養する大会）において、この経を説示して、昼夜にわたった。喜ばされなかった者達は全くいなかった。

『正法華経』が訳出された四年後の 290 年、康那律は仏教知識を有する信者達と共に、『正法華経』を書写し、竺法護と再校訂した後、施檀大会において、昼夜にわたって、在家信者達に初めて説法したとされる。注目すべきのは、在家信者達が非常に喜んだことである（「無不咸歡」［咸（みな）、歡ばせざること無し］）。

---

[42]C:『春秋繁露』董仲舒著（前漢）：建立旗鼓、杖把旄鉞、以誅賊殘。

[43]C:『韓詩外傳』韓嬰著（前漢）：吾豈自比君子哉！志慕之而已矣。

[44]C:『韓詩外傳』韓嬰著（前漢）：好辯論而畏懼、教之以勇。

[45]C:『春秋繁露』董仲舒著（前漢）：故從中春至於秋、氣溫柔和調。

[46]C:『東觀漢記』「敬宗孝順皇帝」班固・劉珍・蔡邕等（後漢）：頒宣風化、舉實臧否。

[47]C:『説文解字』許慎著（後漢）竹部：笘：折竹⊠也。从竹占聲。潁川人名小兒所書寫為笘。

[48]C:『論衡』「答佞」王充著（後漢）：穿鑿垣墻、狸步鼠竊、莫知謂誰。

[49]C:『三國志』陳壽著（西晋）：凡所著述、撰定法訓、五經論。

[50]C:『抱朴子』葛洪著（西晋）：蓋謂有金銀珠玉、在乎掌握懷抱之中、足以供累世之費者耳。

さらに、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の成立前、『正法華経』が知識人の間で愛読されていたことが、『高僧伝』における幾つかの記載から分かる。

『高僧伝』T50.350b29–50c02: 竺法崇 . . . 加又敏而好學。篤志經咒、而尤長法華一教[51]。

書き下し：竺法崇（じくほうすう）. . . 加えて又た、敏（と）くて好學（こうがく）す。篤く經咒に志して、尤も『法華』の一つの教えに長ける。

現代語訳：竺法崇は、. . . さらにまた、〔彼は〕賢くて学習を好んでいた。経典と真言を篤く志向し、『法華経』（『正法華経』）における「ただ一つの教え」（一乗の教え）に最も長けていた。

『高僧伝』T50.350c19–20: 竺法義 . . . 遊刃衆典、尤善法華 . . . 晋太元五年卒於都。

書き下し：竺法義（じくほうぎ）. . . 衆の典にて遊刃（ゆうじん）し、尤も『法華』に善くす。. . . 晋の太元五年、都に於いて卒（しゅっ）す。

現代語訳：竺法義は、. . . 余裕をもって数多くの仏典に取り組んで、最も『法華経』（『正法華経』）に長けている。晋の太元五年（380 年）に都において亡くなった。

竺法崇と竺法義という二人の僧侶は、鳩摩羅什以前の人物である。彼らが持っている「法華」は竺法護訳『正法華経』を指す。したがって、『正法華経』は訳出された後、まさに知識人の間において流通していたことが分かる。

4　結論

竺法護は、同義複合詞を引用して訳経した時、自身とほぼ同時代の先行訳に見るサンスクリット原典の訳し方を尊重しつつ、読者である西晋の知識人の古典的素養を考慮に入れて儒仏道の典籍から訳語を厳選したと考えられる。このような訳経態度から見ると、竺法護訳の研究者たちが中国古典の知識と教養を具えないと、竺法護訳を「不可解なもの」と見なす限界は到底超えられないと言える。

略号及び参考文献

C: The Chinese Text Project.

T: The SAT Daizōkyō Text Database.

SP: [KN]: Saddharmapuṇḍarīka: Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio eds., *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica 10. St. Pétersbourg, 1908–1912. Reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.

王力
1943　『中国現代語法』北京：商務印書館.

辛嶋静志
1998　『正法華経詞典』東京：創価大学国際佛教学高等研究所.

河野訓
1989　「竺法護伝について」『印度学仏教学研究』37(2), 597–600.
2006　『初期漢訳仏典の研究—竺法護を中心として—』伊勢：皇學館大学出版部.

斎藤隆信
1997　「『浄度三昧経』と竺法護訳経典」『佛教大学総合研究所紀要』4, 26–56.
2013　『漢語仏典における偈の研究』京都：法蔵館.

境野黄洋
1931　「『正法華経』と『妙法蓮華経』との比較」『駒沢大学仏教学会年報』1, 74–100

[51]「竺法崇」の在世年代について、『佛祖統紀』（志磐撰）T49.338b11「晋武帝四年 . . . 至湘州麓山三十年」という記録によれば、270–300 であると推定される。

竹田治美
2010 「宋代語録における語気副詞について」『奈良産業大学紀要』26, 35–43.

丁声樹等
1961 『現代漢語語法講話』北京：商務印書館.

鳥井克之
2001 「中国語の語素と単語（下）—中国語教学文法の再構築を目指して—」『関西大学外国語教育研究』1, 65–87.

成田道広
2020 「仏典翻訳の歴史とその変遷⑤」『グローカル天理』4, 5.

西康友
2020 「IT 言語解析による梵文法華経写本と漢訳法華経の対照研究」『中央学術』49, 257–273.

白景皓（Bai Jinghao）
2017 「竺法護訳『正法華経』の〈龍女伝説〉」『比較論理学研究』14, 123–139.
2018 「竺法護訳『正法華経』の〈会三帰一偈〉」『比較論理学研究』15, 179–198.
2019 “On the Latter Half of “*Yaowang rulai pin* 藥王如來品” of the *Zheng fa hua jing* 正法華經: How Zhu Fahu 竺法護 Coined Words to Translate the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*,” *The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 16, 123–133.

橋本昭典
2005 「感情概念の誕生と言語化—中国古代の「情」の地平—」『奈良教育大学国文：研究と教育』28, 18–30.

蜂屋邦夫
1990 「六朝時代の知識人」『中国：社会と文化』5, 32–39.

山口久和
1977 「支謙訳維摩経から羅什訳維摩経へ—訳経史研究の支那学的アプローチ—」『印度学仏教学研究』26(1), 146–147.

（はく　けいこう、広島大学大学院博士課程後期修了［インド哲学］）

On the Quoted Synonymic Compounds 同義複合詞 in the Latter Half of "*Yao wang ru lai pin* 薬王如来品" of the *Zheng fa hua jing* 正法華経

BAI Jinghao

According to the biography of Zhu Fahu in the *Chu san zang ji ji* 出三藏記集, it is well known that Zhu Fahu, who was a famous translator in the early Chinese Buddhist period, lived during the Western Jin dynasty 西晋 (265–314). He translated a great number of sutras including the *Zheng fa hua jing* 正法華経. It is commonly stated that Zhu Fahu's translations are difficult to understand compared to the translations of Kumārajīva 鳩摩羅什 or Xuanzang 玄奘. According to Kawano 2006: 75 and Bai 2017: 127, Zhu Fahu's translations that are found in the *Zheng fa hua jing* contain a symbolic characteristic called "the usage of synonymic compounds." Bai 2019: 126–127 provides a lot of examples, such as "*yang xin* 殃釁 (disasters and faults)" and "*jiao man zi* 憍慢恣 (arrogant, willful and haughty)," corresponding to "*pāpa* (sin)" and "*adhimānika* (self-conceited)" in Sanskrit respectively, which were total neologisms that were created and used only by Zhu Fahu, with parts derived from the doctrines of the three teachings 三教.

Setting aside the question of these synonymic compounds created by Zhu Fahu, this paper presents the synonymic compounds quoted from the preceding Chinese Buddhist sutras, such as the translations of Zhi Qian 支謙 or An Shigao 安世高 and Chinese classics, to clarify Zhu Fahu's translation style. We will focus on the following features of his translation:

1. The synonymic compounds quoted from the preceding Chinese Buddhis sutras, such as "*jingfa* 經法 (doctrine)" were quoted in the translations of Zhi Qian as "*sūtra* (doctrine)," "*fugai* 覆蓋 (covering)" and quoted in the translations of An Shigao as "*vastra* (clothes)."
2. The synonymic compounds quoted from the works of Chinese classics, such as "*zhubo* 竹帛 (bamboo writing strip)" quoted in the *Jia yi xin shu* 賈誼新書 correspond to "*pustaka* (manuscripts)," "*faxun* 法訓 (teachings)" and were quoted in the *San guo zhi* 三國志 as "*sūtra* (doctrine)."

It may be said that Zhu Fahu paid respect to Chinese Buddhist translations and Chinese classics by selecting the synonymic compounds very carefully to spread the *Zheng fa hua jing*, the doctrine of One Vehicle 一乘 to Chinese intellectuals.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 18 (2021): 101–111.
email: haku54kohaku@gmail.com